

平成29年度第2回
東京都総合教育会議議事録

日時：平成29年12月14日（木）10:15～11:45

場所：都庁第一本庁舎42階特別会議室B

○中井教育長 ただいまから平成 29 年度第 2 回東京都総合教育会議を開会いたします。

本日は、NHK 外 13 社から取材の申込みがございます。また、14 名の方から傍聴の申込みがございました。以上の件について許可してもよろしゅうございますか。

(「異議なし」の声あり)

○中井教育長 では、許可いたします。入室させてください。

(報道関係、傍聴者入室)

○中井教育長 それでは、議題に入ります前に、第 2 回会議の開催に当たりまして小池知事から御挨拶をお願いしたいと存じます。

○小池知事 皆さん、おはようございます。平成 29 年度の第 2 回総合教育会議の開催に当たりまして、一言御挨拶を申し上げます。

昨日は、北砂リトルリーグが世界でチャンピオンになったという御報告を受けました。また、いろいろな科学の分野ごとでオリンピックが開かれていて、あちこちの学校の子供たちが金メダルをとったということで、やっぱりこの東京を支えて、日本をこれからも率いていくのは若い子供たちだなど、このようにつくづく感じているところでございます。大いなる可能性を秘める子供たちは、東京が未来に向けて大きく飛躍するための原動力であります。

その子供たちの可能性を伸ばすためには、どういう教育が求められているのか。そしてまた、大変なグローバル化の時代でございます。その進展や、さらには A I などの情報技術の発展というのも日進月歩で進んでいる社会情勢などを踏まえまして、様々な視点から教育についての議論を深めてまいりたいと思います。

特に本日は、都立高校に焦点を当ててまいります。これからの東京、日本を担う人材育成について考えていきたいと、このように考えております。

今日は、校長先生方に学校の取組などをお話いただきまして、今後の都立高校の在り方などについての御議論を賜りたく存じます。

そして、来年度予定いたしております都立高校改革の次期実施計画策定の検討に当たりまして、今日の御議論を反映させていただき、都立高校の発展に生かしていきたいと考えております。

人をつくる教育、その充実は、一朝一夕でできるものではございません。50 年、100 年のスパンで考えることによって、輝ける東京、そして日本の実現につなげていく、このことは不可欠だと考えております。

全ての子供たちの幸せな人生の礎となる教育の実現に向けまして、しっかり協議を進めてま

いりたく存じます。是非、忌憚^{きたん}のない御意見を交わしていただきますように、本日よろしくお
願い申し上げます。ありがとうございました。

○中井教育長 ありがとうございます。

ただいま知事の方からもお話がありましたとおり、本日は都立高校の様々な特色ある取組に
ついて、4校の校長先生においでいただきましてお話を伺うことになっております。

それではまず、4校の校長先生から、簡単に自己紹介をお願いいたします。

○荻野校長 おはようございます。東京都立国際高等学校校長の荻野と申します。どうぞよろ
しく願いいたします。

○白鳥校長 おはようございます。東京都立多摩科学技術高校校長の白鳥でございます。本日
はよろしく願いいたします。

○善本校長 おはようございます。東京都立白鷗高等学校及び同附属中学校校長の善本と申し
ます。どうぞよろしく願いいたします。

○宮本校長 おはようございます。東京都立西高等学校の校長の宮本でございます。よろしく
お願いいたします。

○中井教育長 ありがとうございます。

それでは、各校からお話を伺う前に、まず私の方から、都立高校の全体概要について簡単
にお話をさせていただきます。タブレットを御覧いただきたいと思えます。

都立高校は、全体で186校あります。その中には、全日制、定時制、通信制というふう
に分かれておりますが、上段の全日制については、さらに学年制と、あと、単位制の高校が23
校あります。それぞれ普通科、それから、工業高校、商業高校等の専門高校、それから、その
ほか単位制の中には総合学科高校というのがございます。そのほかに、中高一貫の学校が10
校ございます。

今日お越しいただいている特色ある取組をされている学校について、その周辺のところも含
めてお話をさせていただきますと思いますが、まず「グローバル人材の育成」。「国際バカロ
レアコース」というのは全国の公立高校で国際高校が唯一でございますが、そのほかに、「東
京グローバル10」という形でグローバル人材の育成を進めている学校が10校、さらに、英語
教育推進校40校などございます。

また、今、国際高校の受検倍率が5倍近くという状況が続いておりますので、新たな国際高
校を建設する予定もございます。

次に、科学技術系の学校でございますが、科学技術系の高校は多摩科学技術高校を含めて2

校でございます。そのほかに理数イノベーション校3校、それから、理数研究校が24校。また、このほかに、医学部系を目指す子供たちのグループを作って学習を進める「チーム・メディカル」という学校として戸山高校があります。

次に、中高一貫でございますが、中等教育学校が5校と、附属中学をつけた形の高校が5校ということで、下段にありますとおり、国際色豊かな教育、科学的な探究をする取組に力を入れている学校など、それぞれ特色ある取組をしているところでございます。

それから、進学指導に重点を置いている学校としては進学指導重点校、今日お越しいただいている西のほかに、日比谷、国立など7校がございます。そのほかに、進学指導特別推進校、進学指導推進校などがあるという状況でございます。

今日のお話の中には出てきませんが、このほかにチャレンジスクールやエンカレッジスクール、それから、工業高校でデュアルシステムを行っている学校など、多彩な特色ある取組を各学校でやっているという状況でございます。

それでは、これからそれぞれの学校の校長先生にお話を頂きながら、それについて委員、知事からの意見、質問等をお願いをしたいと思います。

それではまず、国際高校の荻野先生からお願いいたします。

○荻野校長 それでは、東京都立国際高等学校について御説明申し上げます。

本校は、都立高校初の国際学科を有する高校といたしまして、平成元年に目黒区駒場に設立され、今年で29年目となります。調和のとれた国際感覚を身に付け、世界の人々から信頼され、尊敬される人材を育成することが教育理念でありまして、その実現のため、グローバルな視点を育成する国際理解科目という専門科目を設けております。平成27年には国際バカロレア（IB）コースを設立し、平成28年4月からは、海外の有力な大学への進学を目標とするディプロマ・プログラム（DP）を実施しております。

本校の特色の一つに、国籍や文化など、生徒の持つ背景の多様さがあります。右側の円グラフ、「入学種別生徒割合」にあります、この「IBコース生徒」、この生徒のほとんどは海外帰国生徒と在京外国人生徒であるために、全体の4割近くが外国に何らかのルーツや成育歴のある生徒となります。その関係国は35カ国以上に上りまして、これらの生徒が各クラスに在籍しておりますので、教室内は常に多様性にあふれた空間となります。これが、本校の隠れたカリキュラムとして作用し、生徒が多様性を受け入れる資質を形成する基盤となっております。

卒業生の海外大学への進学状況についてであります。昨年度は合格者数が延べ54人、実進学者数は15名と増えました。今年度末はIBコース1期生が進学をすることから、合格者

総数は大幅に増えるというふうに見込んでおります。

また、下の棒グラフを御覧ください。本校は、私立大学の進学希望者が多く、個性を生かしてAO入試で合格する生徒が多いという特徴がございます。

本校の取組についてであります。まず、国際学科、本科ですけれども、語学系授業の中心をなす英語の授業は習熟度別少人数制授業で実施をしております。例えば、1学年においては最大9単位、週当たり9時間まで英語の授業を履修できるように教育課程が組まれています。

この取組の成果を検証するために、TOEIC I Pテストにより定点観測をしております。結果を見ますと、生徒の平均点は、1年次から3年次までの間に150点前後伸びております。そして、3年次には600点を超えております。TOEICの実施団体によりまして、全国の平均点は、高校生で415点、大学生で444点ということになります。

また、国際学科の専門科目のもう一つの領域であります国際理解科目につきましては、1年次に国際地理、2・3年次に日本文化、伝統芸能、地域研究などの選択科目、そして、3年次には異文化理解などを履修します。これらにより、生徒たちは国際政治やグローバルイシューについての理解を深め、日本文化も知り、異文化を理解する基本的な姿勢を身に付けます。

次に、IBコースについてです。現在、3学年合わせて61名の生徒が海外大学の入学資格となるIBフルディプロマと日本の高校卒業資格の取得を目指して学んでいます。

海外大学進学を目指したコースでありますので、IBフルディプロマ取得に関わる授業の教授言語は英語でございます。授業は、世界標準ともいえるべき探究型・双方向型・批評型で、生徒はあらかじめ課題を自学でこなした上で、授業ではディスカッションやプレゼンテーションを中心とした活動により、ロジカルにものを考え、発表し、人に理解をさせる、こういった方法を学びます。今年度末には初めての卒業生が出ます。

最後に、本校の課題であります。まず、本校の教育活動を担う教員・指導者の確保が必要であります。急速に変化する国際情勢、国際機関、NGO活動などの学習に対応できるよう国際理解科目を改善し、現代化していくことが必要になってきております。最新の情報等を伝えられる教員が必要です。

加えて、急増する海外大学進学の指導をする教員の養成も課題であります。

また、IBコースにつきましては、各教科を英語で授業できる教員の確保が喫緊の課題となっております。

あと、2,000万円ほどかかるといわれております海外大学費用は、生徒にとりまして重い負担となっております。本校でもIB試験で高得点が期待される生徒が、費用負担のために多額

の奨学金が出る大学に出願するということが起きております。

以上で説明を終わります。

○中井教育長 ありがとうございます。

それではまず、教育委員の方から御意見、御質問、ありましたらお願いいたします。

遠藤委員。

○遠藤委員 先生、ありがとうございます。

国際高校の取組を伺っておりますと、公立高校では初めてのIBディプロマ、これはすばらしいなと、今後の公立高校のあるべき姿の一つ、モデルといえるのではないかなと思っております。特に、探究型とか双方向型、批評型、こうしたバラエティに富んだ授業のあり方、高校授業の枠組みを超えるのではないかなと、高く評価できるものだと思っております。

先生が御指摘になった課題の一つとして、教員の養成・確保の問題なのですが、伺っておりますと、我々社会人で、いろいろグローバルな仕事をしておりますと、英語教育とグローバル人材の育成、この能力を兼ね備えた先生というのはなかなか一人の先生ではないのではないかなと、英語教育とは別ものかな、この辺、教育の中でどう考えるのか、なかなか難しいかなと思っております。

最後に御指摘を頂きました海外大学進学、これのお金の問題ですが、実は、私は日本学生支援機構の理事長をしておりますけれども、御案内のとおり、今年度から学士入学、学部入学の高校生向けの海外留学奨学金、この制度を開始しまして、今年度は厳しい試験をしまして、全国で33名合格をいたしました。うち、4名が都立高校生で、そのうち2人は国際高校ということで、東京都の教育委員としては非常に、その結果を見ましてうれしいなと思ったところでございます。

今後も、私ども制度拡充に向けて頑張っておりますので、どんどん受験をさせていただければと思います。

以上でございます。

○中井教育長 ありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。山口委員。

○山口委員 先生、ありがとうございます。

遠藤先生と重なるところもございますけれども、今の時代、グローバル人材を輩出するためには必須な高校であるというふうに考えております。

御質問と要望なのですが、やはりこちらの高校を出られて、恐らく様々な世界で活躍

されていくとは思いますが、やはり高校から大学、そしてその後ですね、その後、どういう道を進んでいくかということが、一番教育の成果としては重要になってくると思うのです。その辺りのところで、今までの実績、あるいはこれからというところでどのような追跡調査が可能なのかどうか。また、そういった追跡調査によって、こういった活躍をしているということが、今いる生徒たちへの恐らくロールモデルにもなっていくのではないかと思うのですね。やはりこのような勉強をして、こうやってこんなことが実現できるのだという、具体的なことが分かってくると、さらに勉学にも影響があるのかなというふうに思っておりますので、その辺りのところの質問というか、お願いということです。

そこに関連してもあるのですけれども、男女比率を見ると、女性がおよそ8割なのですね。これは今の時代を反映しているのか、ちょっとその辺りどうなのかということなのですが。ただ、女性が8割いるということは、ここも先ほどのことに関連すると思うのです。

15歳ぐらいまでは男女のキャリア意識というのですか、ほとんど変わらないと言われていたのですが、年齢がいくに従って女性の方が控えめになるというか、意識が逆転していく、そういった意味では、こちらの高校で、この8割の女子生徒たちが活躍していく姿はこの日本における女性活躍のロールモデルになっていくと思いますので、その辺りのところも教えていただければと思います。

最後に、先生からも御指摘ありましたけれども、やはり教員の確保というところ、これはスポーツも同様なのですけれども、指導者を養成していくというのはセットで必要なことで、ただ、いい教員を獲得することも重要ですが、やはり今国際社会も非常に動いておりますので、その獲得した優秀な教員たちが、常にそのレベルを維持できるような研修の制度とか、例えば、海外の大学での状況を見てくるとか、そういったようなことも個人ではなかなか難しいので、学校であるとか、あるいは東京都がどのような支援をしていけるのかなというふうに私は考えておりますので、その辺りのところも御意見があれば頂戴したいと思います。

以上です。

○中井教育長 では、荻野先生、お願いします。

○荻野校長 それでは、私の方からお答えできる範囲でお答えをさせていただきます。

まず、最初、遠藤委員から頂きました英語教育とグローバル人材の必要な能力の問題ですけれども、もちろん英語教育の目標は、世界の人たちとコミュニケーションをより良くとるために、道具としての英語運用能力のスキルを上げるということでございます。英語を学ぶということと、やはり学ぶ過程で文化を学ぶということは、これは分かち難い関係がございます、

そういった意味では、生徒たちは、英語を学びながら、主に英語を母国語とする英米の価値観・文化を学ぶということになっております。そういった現実がございます。

一方で、本校のグローバル人材育成の教育目標は、先ほど発表でも御案内いたしましたように、異文化を柔軟に受け止める力の育成ということであり、人が持つ違いを違いとして理解し、自分と異なる考えの人々にもそれぞれ正しいことがあり得るのだということを認める人間を作ることだと思います。

御指摘のように、この両者の能力は必ずしも一致するものではありませんけれども、逆にまた必ずしも矛盾するものではないわけでもございまして、私どもグローバル人材の育成を目指す中で、一つの人格の中で、また、一つの生徒、一つの教育者の中で、両方兼ね備えるべき技能であるというふうに考えてございまして、本校のカリキュラムは、そのような考えから組み立てられております。

2点目でございますが、卒業生の把握及びロールモデルの件でございますけれども、29年目の学校でございまして、まだまだ同窓会制度も充実したものとはなっておりません。ここについては、引き続きしっかりした同窓会を作って、そういった情報が入ってくるように心掛けたいと思っております。

生徒たちのロールモデルは、今ありましたように正に卒業生でございまして、本校では様々な方面で活躍する卒業生による講演会を随時開催をしております。最近では、この11月に国連に勤める卒業生による講演会を実施いたしまして、帰国の機会を捉えまして、自らのキャリア、自らの高校時代、それから、高校時代に取り組むべきことについて話をしてもらいました。これは、平日の夕方にもかかわらず、生徒・保護者合わせて150名ほどが参加をしていて、世界で活躍する先輩の話に聞き入っているという姿が見れました。

また、生徒たちの保護者の方々もロールモデルとなっております。本校生徒の保護者の中には、外交官であるとか、国際公務員であるとか、多国籍企業、あるいは国際的な団体等で、第一線で働く方々が多数いらっしゃいます。そういった方々の御協力を仰ぎながら、毎年6月に、1年生全生徒を対象に、国際的な仕事についての話を聞くキャリアガイダンスを行っております。

それから、3点目でございますが、男女比ということで、これは結果、応募の段階から実は男女比もほぼこのような状況になっております。本校は国際学科で、専門学科であるために、男女別の定員を設けておりません。成績順に合格をさせております。したがって、このような結果になっているということでございます。

女性も生き生き活躍する社会、私たちも目指しているところでありまして、実は、うちの生徒たちは非常に生き生きと、もう男女という性差ではなくて、一人一人の個性、また活力、それがじかに生きるような学校づくりをしております。

4点目、研修育成につきましては、今後ともお願いしたいと考えております。

どうぞよろしく願いいたします。

○中井教育長 ありがとうございます。よろしゅうございますか。

では、知事の方から。

○小池知事 ありがとうございます。

初めての卒業生、バカロレアコースで出すということで、大変楽しみでございます。

質問とすれば、多額な奨学金を出すところを目指す、海外ですね、そういったケースが多いというのは、例えば、具体的にはどういうところがあるのかなというのが1点と。

それから、いわゆる東京大学への進学率が多いといつも言われている灘高ですか、兵庫県の灘高から、普通は東大とかこういう国立を目指す傾向が多いけれども、その中で、MIT（マサチューセッツ工科大学）に行くか、もしくは、ハイデラバード工科大学を目指すかといつて、ハイデラバードを選んだという学生がいるというのが、読んだ記事の中にありまして、「すごい状況になっているんだな」というふうにも思ったわけなのですね。

ですから、海外留学というのも、もうこの世界の大学のランキングも熾烈な競争がある中で、そういう中で、是非日本の有為な人材を育てていただいて、世界で戦えるというとか、世界で勝負できるような、そういう学生を是非育てていただきたいと思います。

日本人の能力、知識、その他、もう世界に冠たるものがあると思うのですが、残念ながらそれが世界へアピールできていないということが最大の問題だと思っておりますので、そういう意味では、活躍されること、そして、卒業生がどういうふうに育っていくのか、大変楽しみにいたしております。

一つ、どういったところの奨学金の話と、もう一つ重要なのは、英語で教える教員の確保、どういう苦勞をなさって、どうすれば都としてサポートできるのか、お考えをお聞かせいただければと思います。

○中井教育長 では、荻野先生。

○荻野校長 IBディプロマで、比較的高い成績が期待できる生徒が、今、フルのスカラシップがとれる大学を目指しております。具体的な大学の名前をということでございましょうか。

今、その生徒につきましては、トロント大を目指しております。

○小池知事 奨学金がちゃんとしているのですか。

○荻野校長 しているということですね。

経済的なところも考えながら、生徒たちは、最終的に進路を決めているという状況がございます。

それから、英語による授業の教員の確保につきましては、教育委員会の方の御支援を頂いているところでございます。これにつきましては、しっかり育成するというので、そのプランに乗っているところでございます。

また、今いる教員につきましても、海外で、IBのワークショップ等出張をする機会がございます。そういったときに、様々な学校の方に行って、研修をしたり、本校のIBのことを紹介したりということで、能力、資質を高めているという状況でございます。

○中井教育長 英語と専門教科を両立するには、やっぱり一定の習熟期間、研修が必要なので、そういう面では、通常の定員プラスアルファみたいなことをしていかないと、なかなか難しいというところはございます。

それから、海外に直接行く生徒は年々増えていまして、直近の年ですと73名、都立高校を卒業した後、すぐ海外の大学に行っているという状況であります。

先ほど学生支援機構の生徒で、4名都立高校生が奨学金を頂くことになったのですが、大変有り難いことなのですが、全体のボリュームからすると、まだまだ少ないと。

○小池知事 卒業後すぐといっても、大体海外の大学は9月とか10月なのだから、そこら辺の問題はどうなのですか。

○中井教育長 その期間のギャップは、これはもうしょうがないということで。

よろしゅうございますか。では、時間の関係もございますので、多摩科学技術高校の方に移らせていただきたいと思います。

白鳥先生、お願いいたします。

○白鳥校長 よろしくお願いいたします。

それでは、多摩科学技術高校の教育活動について御説明いたします。

タイトルにもございますとおり、本校は「世界で活躍する未来の科学者・技術者の育成」を目指して教育活動を行っている学校でございます。文部科学省からはスーパーサイエンスハイスクールの指定を、東京都教育委員会からは理数研究校、英語教育推進校の指定を受けておりまして、来年度からは、新たに進学指導推進校の指定も受けることになっております。

そこにある写真は、本校の教育活動の柱の一つであります、研究活動の成果をポスター発表

している場面でございます。また、研究活動については後ほどお話させていただきます。

続きまして、本校の沿革についてですけれども、本校は多摩地域の伝統ある小金井工業高校全日制課程を改編いたしまして、平成 22 年 4 月に、理系に特化した進学型専門高校として開校いたしました。科学技術科という 1 科 4 領域で学習を行っておりまして、その領域は、バイオテクノロジー、エコテクノロジー、インフォメーションテクノロジー、そして、ナノテクノロジーの 4 領域でございます。

現在の生徒数は 626 名、1 学年が 6 クラスで、男女比は、各学年ともおよそ 3 対 1 という形になっております。

本校の進路実績についてですけれども、本校は開校 8 年目の学校でございます、卒業生は、まだ 5 期生までしか出ておりません。小金井工業高校時代の進路状況と申しますと、4 年生大学への進学は生徒のおよそ 10% から 20% という状況でしたけれども、進学型専門高校として開校いたしましてからは、そのグラフにありますとおり、大学進学者が増加いたしまして、特に国公立大学への合格者は年々増加傾向にあります。

また、高校での研究成果を生かして、推薦入試で大学に合格する生徒が多く出ているという現状です。昨年卒業した 5 期生からは、研究成果をアピールして東京大学理科 I 類への推薦合格者を出すことができております。

次に、本校の教育活動の特色についてですけれども、最大の特色は、研究科目を設置いたしまして、3 年間の系統的な探究活動を推進しているところがございます。1 年次は「科学技術と人間」などの三つの専門科目を 4 領域の導入として学びまして、2 年次の課題研究、そして、3 年次の卒業研究、この 2 科目を研究科目として設定しております。

生徒は、この 4 領域の中から興味・関心に応じて一つの領域を選択しまして、個人又はグループで研究を進めてまいります。研究テーマにつきましては、担当教員と面談を重ねながら、自ら設定することになっております。また、研究の成果は報告書にまとめ、発表会という形で、年に 1 回必ず全生徒が発表いたします。報告書の要旨部分につきましては、将来の英語による論文作成を見据えて英語で作成しております。これらの研究科目というのは、課題発見・課題解決に向けて、主体的・協働的に学ぶ、いわゆるアクティブ・ラーニング型の授業ということになっております。

それでは、4 領域の一つでありますインフォメーションテクノロジー領域について、具体的に御説明いたします。

この領域の目的は、単にプログラミング言語を知るということではなくて、論理的思考力や

課題解決力・創造力を育成するということをございます。1学年では、全員に対してレゴブロックを用いたロボット制御などを行いまして、2学年で、このIT領域を選択した生徒に対しては、コンピューターネットワークやAIを活用した音声認識・画像認識などの研究テーマの設定なども行っております。

また、教材として人型ロボットも導入しております、学校見学会では、生徒がプログラムした内容でロボットが中学生に学校の説明をいたしました。写真は、その一場面でございます。

二つ目の特色として、スーパーサイエンスハイスクール、SSH校としての取組についてお話いたします。

まずは、カリキュラム開発ということなのですが、課題発見や課題解決能力育成のために、「科学技術と人間」あるいは「先端技術と社会」などの学校選定科目を開発してまいりました。

大学教授などをお招きして、最先端の研究や技術を学ぶアドバイザー制度、また、大学の研究室を訪問して、1日大学院生の活動を学ぶジョブシャドウ、さらには、既に大学の研究室に入って研究活動を行っているという生徒もおります。国際性の育成という点では、海外の研究者をお招きして英語による講演を行っていただきますサイエンスダイアログという取組、また、海外で研究成果を発表する海外研修などにも取り組んでおります。

最後に、今後の展望と課題ですけれども、展望といたしましては、卒業生が大学や大学院、さらには研究機関などで研究活動を継続して、世界で活躍する科学者・技術者になるという展望を抱いております。

それに向けた課題といたしましては、大学と一層連携し、本校で取り組んだ研究活動を大学に進学した1、2年次から継続できるようになるということが課題かなというふうに考えております。現在多くの大学では、1、2年次では研究活動ができずに、本校での取組を継続することがなかなかできないという状況にあります。意欲がある生徒が研究を継続できるような仕組みの構築をお願いしたいというふうに考えております。

また、本校では、研究活動には欠かせない分析機器や実験機器などを多数そろえております。これらを維持・管理、更新して、常に有効活用できるようにしておくということが研究活動の推進につながると考えておりますので、これらの環境整備がやはり一つの課題であるというふうに考えております。

私の説明は以上であります。ありがとうございました。

○中井教育長 ありがとうございました。

それでは、教育委員の方から御意見、御質問等、お願いいたします。

秋山委員。

○秋山委員 秋山です。幾つか質問をしたいと思います。

平成 22 年度に開校して、まだ 8 年目でありながら、文科省から指定を受けたスーパーサイエンスハイスクールなど様々な取組をされておられます。素晴らしいと思います。そのための研究活動やカリキュラムの用意に、教員の方々はかなりの御努力をされているのではないかと思います。その環境整備、また、専門的な教員を充実していくには、どのような工夫をされているでしょうか。教育環境はとても大切で、児童・生徒にとって、本物に触れさせることが興味・関心を引き出していくことにつながるのではないかと思います。専門的な高校であればあるほど、その本物を求められる教育環境が必要だと思えます。

もう 1 点、質問ですけれども、それは、15 歳の時点で、自己適正が絞られて入学してこられるということはすごいと思います。それには、中学校までの義務教育の役割が大きいのではないかと思います。科学技術に特化した教育を希望する子供たちにはどんな特徴があるのか、また最後に、万が一在学中に生徒の志望が変更した場合、どのような進路指導がなされているかということを知りたいと思います。

○中井教育長 では、白鳥先生の方からお願いします。

○白鳥校長 まず、専門的な教員の充実ということですが、やはり常に研究活動、最先端のものを生徒に体験させるということは、教員自身も研修をしていくという必要がございます。そのために、大学の研究室に教員を派遣して、大学教授から最先端の科学について学ばせる、あるいは研究の仕方について学ばせるというようなことをやっております。やはり、教員を育成していくということが大事になってくると考えております。

二つ目ですが、科学技術に特化した教育を希望する子供たちの特徴ということですが、やはり一つのことに非常に強い興味・関心を持っている生徒が多いと考えています。やはり、小さいころから何か一つのことに興味を持ち続けて、それが本校でできるというようなことで入学してくる生徒さんが多いと考えています。

最後、三つ目ですが、在学中に万が一志望変更というのがあった場合ということですが、まず、そのようなことがないように、事前の学校説明会等で「本校は理系に特化している。強い決意を持って入ってきてください。」ということは、再三申し上げております。しかし、入ってからどうしても合わないという生徒が全くいないというわけではございません。ただ、そういう生徒さんは、カリキュラムの中でなかなか対応することは難しい、理系に特化したカ

リキュラムを作っておりますので難しいのですけれども、文科系に進みたいという生徒には、朝の講習ですとか、土曜日の午後の、土曜授業の後の講習ですとか、あるいは長期休業中の講習等を活用いたしまして、様々な機会としては与えておるという状況でございます。

○中井教育長 よろしいですか。

では、ほかにいかがでしょうか。遠藤委員。

○遠藤委員 秋山委員からのいろいろなお尋ねに御回答いただきましてありがとうございます。全くすばらしい教育をしていると思います。

先生のお話の中の課題なのですけれども、大学1年、2年次も継続して研究したいというお話、これは、意味としては、せっかく高校で3年間専門的な勉強をしてきたのに、大学に入ると1、2年次で途切れてしまうというような御心配なのかなというふうに理解したのですけれども。

例えば、こういうルート、5年制の工業専門学校、高専がございますね。その4年次に編入ができますから、多摩科学技術高校で3年やって、高専の4年に編入して、4、5年、そこで連続すると思うのですね。そうすると、高専の5年で卒業できますと、今度は4年制大学の学部の3年から編入できる。そうすると、多摩科学技術高校3年、高専2年、それから大学2年という連続というのも一つのルートかななんて、お話を伺っていて感じたので、意見として失礼します。

○白鳥校長 貴重な御意見ありがとうございます。

本校の生徒で、今のところまだ高専への編入というのは、現在はいないのでけれども、一般的に大学に進学すると、1、2年次はどうしても教養科目の履修というようなことが多くございますので、そこを何とかできないかなというふうには考えております。

ただ、本校の生徒の中には、先ほども申し上げましたが、既に高校生段階から大学の研究室に入って研究をしているという生徒も、数は本当に少ないのですけれども、おりまして、そういう子たちが大学に入って、またそのまま研究室で1年次から研究を続けるような環境になればいいなというふうに考えております。

幾つかの大学では、もう既にそのような取組もされているというふうに聞いております。

○中井教育長 今日欠席の北村委員からは、今大学の方でもそれぞれ大学改革を進めていると、例えば、東工大では、学部と修士、通常だったら6年かかるところを工学系について5年間で終了できるプログラムを検討しているというような話もあるということから、そういった大学での改革に、高校側から、高大接続の観点からの働き掛け、そういったものをもっと積極的に

行っていくべきではないかというような御意見も頂いております。

それでは、最後に知事の方からお願いをいたします。

○小池知事 科学技術、これからの日本を支える大きな柱、それを学ぶ生徒さんを鍛えていただいて誠にありがとうございます。これからますますA I時代などといって、人の代わりにロボットとか何かが、コンピューターがやってくれてしまうなんていうと、人間の存在そのものが問われるような時代にもなっている。しかし、そういう中で、是非、多摩科学技術高等学校で学ぶ子供たちが、今後も日本の技術をリードしてくださるよう心から願っております。

そういう中において、英語で研究論文を書かせるというのは大変良いことではないかと思えます。やはり研究をして、その後、ネイチャーであるとか、そういう一流の科学専門誌に投稿しないとエントリーが、ノーベル賞が出れば何よりもいいのですけれども、やっぱりエントリーさえできないということになると、もう試合放棄に等しいかと思えますので、そういう意味では、高校生のときからそうやって鍛えていただくというのは大変結構なことではないかと思えます。

それから、先ほどの大学入って1、2年間、だからずっと実際に泳いできた子供たちが、急に座学で1、2年使ってしまうという、このギャップではないかと思うのですけれども、ここはむしろ大学の問題なのですかね。その辺りはどのようにしていけばいいかというのは、例えば、首都大の方にもちょっと聞いてみますけれども、どういう連携が必要なのか。教育というのはシームレスに考えていかないとイケませんので、その辺りの全体の教育のパッケージとしてどうかという大きな課題を頂戴したかと思えます。

ちなみに、皆さんにお聞きしたいのですけれども、都立高校の修学旅行は、どこに行くの。

○中井教育長 もっとも多いのは、沖縄です。

○小池知事 そうなのですか。

○中井教育長 あとは、やっぱり京都。

○荻野校長 国際高校は、海外修学旅行を実施しております。韓国に行ってまいりました。

○白鳥校長 本校は、典型的な京都、奈良ですとか、広島ですとかというようなところに行っております。

○善本校長 本校は、台湾が修学旅行でございます。

○宮本校長 本校は、京都、奈良でございます。

○小池知事 いろいろ事情はあると思えますけれども、この間シンガポールに行きまして、シンガポールは今、シンガポール大学ですか、もう目覚ましい国際競争のランキングで10位に

も入るぐらいになっていて、もう本当に、あの国は人をいかにして育成するかが国の存続にかかっているということで、徹底してやっていたりするので、修学旅行なども、どこで何を学ぶかも、それぞれの学校のビジョンを示しているかと思えますので、いろいろその辺りもよく考えて、そして、思い出深い修学旅行にさせていただきたいと思っています。

以上です。

○中井教育長 ありがとうございます。

それでは、次に、中高一貫校である白鷗高校、善本校長先生、お願いします。

○善本校長 それでは、白鷗高等学校及び附属中学校について御説明を申し上げます。

本校は、明治 21 年、1888 年に東京で最初の府立高等女学校として、台東区元浅草の地に開校し、戦前は第一高等女学校として、日本の女子教育をリードしてまいりました。戦後、白鷗と名前を変え、男女共学の進学校となり、平成 17 年には都立初の附属中学校を設置した中高一貫教育校として発足し、現在に至ります。

このように、常に「初めて」という冠のつく道を歩んできた本校の教育理念は「開拓精神」です。

そして、伝統ある本校に今新しいミッションが与えられています。グローバル人材育成を目指し、国際色豊かな学習環境の充実を図るというものです。このミッションにおいて、私たちが育てたい生徒像とは、次のようなものです。

自己のアイデンティティを確立し、ダイバーシティ（多様性）の尊重を基盤に、国際的な「競争」と「協働」の両方ができる人材。日本人は協働的な作業は得意だけれども、競争となるとやや弱いとよくいわれています。どちらか一方だけではだめで、競争も協働もできる人材を育てていきたいと考えています。

本校は、中高一貫教育校であることを生かし、6年間の系統的なキャリア教育を行っています。ほぼ全員が大学進学を目指し、卒業生の8割以上が現役で4年制大学へ進学しています。

次に、本校の中高一貫校としての特色ある取組です。

日本の伝統・文化理解教育については、中学入学時から上野・浅草の伝統文化体験や農村体験等、また、音楽の授業での全員の三味線習得など、様々な体験活動によって学びを積み重ねます。そして、高校2年生では日本文化概論という本校独自の学校設定科目も置いています。中学で、入試において特別枠として、囲碁・将棋・邦楽・邦舞・演劇という日本の伝統分野で卓越した才能を持つ生徒を毎年数名入学させています。将棋の藤井四段の30連勝を阻止した佐々木六段は本校の卒業生であり、在学中からプロになったものを含めて、既に9名のプロ棋

士を輩出しています。歌舞伎や能・狂言・琴・日本舞踊の分野の未来を担う生徒たちもいます。和太鼓・長唄三味線といった特色ある部活動も大変盛んで、文化部の甲子園ともいわれる全国高等学校総合文化祭において、今年度都立高校でただ一つ、本校の百人一首部が全国優勝を果たしました。

一方、国際理解教育も大変充実しており、昨年のリオネジャネイロオリンピック・パラリンピックにおいて、日本代表として、学校交流プログラムであるトランスフォーマ・コネクションのプロジェクトに参加し、現地リオの高等学校と、文化ボックスやビデオレターの交換等の交流活動を行いました。

英語教育も4技能に加えて、プレゼンテーション能力の育成を合わせた5技能の育成を進めており、昨年は中学校終了までに90%の生徒が英検準2級以上を取得、うち33%は2級以上を既に取得しています。これは、文部科学省公表の全国の数値と比較した場合に、高等学校卒業時までに準2級以上を取得した生徒が13%ですから、非常に大きな成果といえると思います。

最後に、本校の課題について、2点お話をいたします。

都立中高一貫教育校10校のうち、5校が本校のような併設型で、高校からも入学できます。中高一貫校は、中学段階での先取り学習が国からも特例で認められているのですが、中高一貫校のメリットを最大限生かした、生徒にとって効果的な教育活動とするために、そうした先取り学習を行う中学からの入学生と、高校から入学した生徒の学習をどのように融合していくかが課題になっています。

また、グローバル人材の育成のためには国際交流の機会を増やすことが重要ですが、海外に出掛けていくことも大切ですが、それ以上に受入れの機会を増やすことで、日本にいながらにして世界の人々とつながっていく、また、日本を知っていただく機会とする必要があると考えています。東京都教育委員会の新たな取組である東京体験スクールで、本校は最初の受入れ校となりました。今後も、受入れ家庭の負担も考慮しながら、このような機会をどう増やしていくかが課題と考えております。

以上でございます。ありがとうございました。

○中井教育長 ありがとうございました。

それでは、教育委員の方から。宮崎委員、お願いします。

○宮崎委員 御説明ありがとうございました。

実は、東京都教育の日に発表をされているところを拝見いたしまして、私は大変感銘を受け

ました。三味線の、20人ぐらいの編成を中心とした邦楽の演奏でありまして、上手なもののようなのですが、私が感動したのが、楽しそうに、うれしそうに生徒一人一人がこの邦楽に取り組んでいるという、この姿勢ですね。好きなのが伝わってくる、これは本当に素晴らしいと思いました。

今、グローバル化に対応するためにどんな人材を育成するかという議論が盛んに行われていて、今までの御発表の中でももちろんございましたわけですがけれども、基本的には、異文化理解です。異なる価値観であるとか、異なる歴史的背景であるとか経緯とかをいかに相互理解をし、きちんとした軸足の上で対応できるか、正にダイバーシティとアイデンティティなのですね。だから、それを掲げている教育がこのような形で、見える形で効果を上げているということを私は高く評価をしたいと思っております。

なぜテロが起きるかとか、なぜカタルーニャは独立したいのかとか、何でパレスチナが認証されるといけないのかと、そういうことの背景というのをきちんと理解しないと、ただ言葉としての英語が話せるだけでは、十分ではないのですね。本当の意味で世界に通用する国際相互理解ができる人材になるためには、そこはとても大事。

それと、同じ時代で輪切りをした横のグローバル化と同時に、縦ですね、時間軸。先ほどのカタルーニャならば、ジョージ・オーウェルがカタロニア賛歌を書いた時代と今とどうつながっているのかとか、そもそも、カスティリヤの王女がどうしたとか、5、600年経ちますけれども、そういう縦のつながりとか、そういうものも分かっていないといけない。

それを見据えていくには、やはり自らの視点をどこに定めるかとても大事で、その意味で、御校の場合は日本文化ということを中心にしていらっしゃる。これ、何を軸にしてもいいと思うのですよ。だけれども、この場合はこれだというのがはっきり出ているというのは素晴らしい。

そこで、課題としては、お挙げになっていることもありますけれども、私が一番心配なのは、指導者の問題と、それから、モチベーションを、中高だと6年間ですよね、どう維持し続けるのか、あるいは発展させていくのか。指導者が転勤で変わった瞬間にその分野が全くだめになるというケースは公立校の場合は宿命のようにあるところがあるので、その辺の連携をどうしていくのかということについてどうようにお考えなのか。

それから、お話しに出た居ながらにして国際交流というのはとても大事な発想なのですが、これは各大学が今、サマースクールなど世界の学生たちを招いて、いろいろなアクティビティをするような機会もたくさんありますから、そういうところと提携して、私の大学でも高校生

を大分受け入れております。そういう機会にどんどん参加していただくとか、アウトソーシングも含めて考える。全部自分でやろうとすると無理がありますから、アウトソーシングも含めて考えられるといいかと思えます。

以上です。

○中井教育長 では、善本校長先生の方から。

○善本校長 ありがとうございます。

指導者の問題ということでは、例えば、音楽の三味線については、幸いなことに音楽の専科の教員が三味線もできる教員でございますけれども、もちろん東京都の人事の制度を利用しながらそういう人材を発掘していく、そういったことは必要かと思えます。

また、三味線の場合だけでなく、長唄の場合には、地域の専門の方に御指導に来ていただいて、そういった方はその人事異動の影響によらず長く御指導いただくことができるので、学校だけではなくて、正に地域の人材をどんどん活用させていただくということを是非考えていきたいというふうに思っています。

モチベーションということについては、これは、日本の伝統文化理解教育もそうですし、国際理解教育もそうなのですが、本校は中高一貫校で、特に中学段階では体験を増やすことで、頭の中だけで考えるのではなくて、本当に実際に体験するということが非常に大きなモチベーションになっているということで、先ほど系統的なキャリア教育を6年間と申し上げましたが、特に明確に中学段階の3年間は体験に基づく教育とするということを私どもではうたっていて、それを非常に意識しています。その体験が、高校生になったときには、今度はもう少し理論で、あるいはロジックで理解できるように進めていきたいと考えています。

アウトソーシングの点について、今御助言いただきましたので、是非今後活用させていただければと思います。ありがとうございます。

○中井教育長 では、ほかにいかがでしょうか。

秋山委員。

○秋山委員 ありがとうございます。

創立 130 周年という長い歴史を持ちながら、常にパイオニアであり続けられていることに、心から敬意を表します。

そのためには、中高の連続したカリキュラム作成だけではなく、中学校と高校の教員の先生方の相互理解と、それから、生徒間の交流が大切なのではないかと思います。どのような取組をしておられるでしょうか。これは、現在取り組んでいる中高一貫、あるいはこれから今後

取り組もうとされている中高一貫へのメッセージになるのではないかと思います。よろしくお願ひします。

○善本校長 ありがとうございます。

これは、本校だけの特色なのですから、歩いて6、7分なのですが校舎が二つに分かれておまして、東校舎と我々が呼んでいる校舎には、中学校の1年と2年だけがあります。そして、西校舎の方に中3から上がいるということで、6年間の教育を中高一貫校であることを生かして、2年ごとに三つのタームに分けて考えるというふうなことを今進めています。

その中で、中高一貫校の一つ難しい点は、6年間の指導していく中で、普通の高校であれば、高校に入るところで子供たちは自らの力で非常に大きな階段を上るのですが、ずっと連続しているために、お互いによく分かっているし、甘えも出るところがあるので、その三つのタームで階段のステップにしていこうと考えています。

また、教育活動においては、中高両方を多くの教員が教えていますので、学校名としては別のようであっても、全く一体の学校として教育をしていますし、中学から高校へを連続して教員が教えられるような仕組みになっているかと思ひます。その点が中高一貫校としては大事なことだと思ひますので、両方を教えていくというふうにもこれからも進めてまいりたいと思ひます。ありがとうございます。

○中井教育長 では、知事の方からお願ひいたします。

○小池知事 来年度創立130周年ということで、おめでとうございます。

この東京のアイコン、新しい海外への発信で「Tokyo Tokyo」というのがありますが、そこに小さく「Old meets New」と。古きを訪ね、新しきを知るではないのですが、まさしく三味線、百人一首といった伝統の部分と、それから、海外へ打って出るといふ、スタンフォード大学への研修旅行といふのは、これなども良い研修旅行ではないかなといふふうにも思ひます。これは、全員行くのですか。

○善本校長 グローバル人材育成のミッションを頂いたときに、やはり何か新しいことをしたいということで、今の中学校2年生が来年度中学を卒業するときの春に、中学生160名全員を連れてまいります。そこで、スタンフォード大学でセミナーを御準備いただいて、そこで世界を見るということで、現在の中学校2年生はそれを目指して、今もう一生懸命勉強をしています。教員たちも武者震いがするようだと、初めて中学生をスタンフォードに送るわけですから、最大限のことをできるようにしたいということで、今、子供たちも、教員も精一杯努力をして、準備をしているところです。

○小池知事 大変な刺激になるし、多分人生でも大きなステップアップへの良い機会になるのではないかなと、このように思いました。

また、中高一貫というプラスの部分で最大限生かしておられる2年ごとのこのタームというのは、なかなかよく考えておられるかなというふうに思います。

中高一貫の良さというのも、これまでも研究をされ、それがまさしくベースになっているかと思うのですが、是非その辺りは、良い部分を伸ばしていただいて。課題もおありでしょうから、それについてはまた、いつもこちら、都の方にまたフィードバックしていただければと、このように思っております。

是非、そういう国際的な人材がたくさんいらっしやって、日本の魂と心を持っているということは、これはもう全部の学校に通ずるのですけれども、ラグビーのワールドカップとか、2020年のオリンピック・パラリンピックなどなど、今いろいろな分野で活躍してもらえる人材が育ちつつあるなということを実感いたしております。頑張ってください。

○善本校長 ありがとうございます。

○中井教育長 ありがとうございます。

それでは、最後に、西高校、宮本校長先生、お願いいたします。

○宮本校長 それでは、西高校の紹介をさせていただきます。

都立西高校は、杉並区久我山の、住宅街の真ん中にある学校です。自主自律、文武二道、それから、将来を見通した進路指導という、この三つを柱にして、世界に通用する大きな器の人材をつくるということを目指し、様々な教育活動を行っています。

東京都教育委員会からは、進学指導重点校、東京グローバル10、理数研究校の指定を頂いております。

本校は、今年でちょうど創立80年を迎えました。1学年が8クラス、合計24クラスで、約1,000名の生徒が、毎日、元気に学校生活を送っています。

本校の進路状況ですけれども、ほぼ全員が難関の国公立大学を目指しています。生徒の方には、大学の名前ではなくて、自分の将来を考えて、自分が最も生かせると思われる大学を受験するようにと言っています。年度によって若干の増減がありますが、一番右端が進学指導重点校指定の前、平成12年度ですので、そこから比べていただきますと、難関大学への合格者が増えているということがお分かりになるかと思えます。

次に、本校が力を入れている取組についてお話をします。

まず一つは、多彩なキャリアガイダンスを通して将来を考える取組です。

本校には各界の第一線で活躍されている卒業生がたくさんいらっしゃいますので、この方々に学校においでいただいて、今やられているお仕事、あるいは研究の様子を子供たちに直接話をさせていただいています。

また、同じ時期にこの西高校で高校生活を過ごして、高校卒業後様々な方面で活躍されている方をお呼びして、パネルディスカッションを開いて、生徒たちに自分の生き方を考えるというきっかけをつくっています。

また、大学の研究所を訪問するとか、医師、銀行員、商社マン、こういう方々のお仕事を1日朝から晩までずっと後ろで見学をさせていただくという、ジョブシャドウイング等を行いまして、実際の仕事、あるいは研究がどういうものかということを知る取組もしています。

二つ目は海外交流事業です。毎年3月の末に、40名の生徒が、ボストン、ニューヨークに行っています。ハーバードでは実際に講義を受けさせていただいています。MITでも実験をさせていただいています。また、ニューヨークでは、国連の本部で直接国連の職員の方から国際貢献のレクチャーを受ける、あるいは、グラウンド・ゼロを見に行くとか、そのような実践的な取組をしています。その一方で、今年からインドネシアの学校と姉妹校提携を結んで、アジアの高校生との交流を始めているところでございます。

これが、ハーバードで実際の講義を受けている写真です。子供たちは大変緊張していますがけれども、本当に目を輝かせ、ものすごく興奮をして、感激をしていつも帰ってきております。

次は、理数研究校指定による研究活動の充実です。三宅島で毎年フィールドワークを行ったりしています。あるいは、国際オリンピックでも積極的に活躍をして、過去は地理、生物分野で日本代表になっています。今年の夏も頑張りまして、日本生物学オリンピック本選で、2年生の女子ですけれども、上位10名の中に選ばれました。また、来年度の世界代表の候補は今16名ですが、そのうち3名が今本校の生徒で、何とか世界大会に出られるように、今一生懸命頑張っています。

それから、伝統的に学校行事は生徒がゼロから自分たちで企画をするということで、何か月もかけて一生懸命企画をしていますし、また、部活動も大変本校は盛んです。今年の部活動の加入率は136%です。文科系の部活を幾つも兼部をしますのです、音楽部と生物部とか、新聞部と美術部とかを兼部するといった生徒がたくさんいます。

実は、このパンフレットの表紙を書いているのは、男子のバスケットボール部員です。男子のバスケットボール部員で美術部員でもあります。このようにいろいろなことに積極的にチャレンジするというのが本校の生徒の特色だと思います。なかなか面白いと思います。

この写真は、三宅島のフィールドワークです。三宅島は過去に大きな噴火がありました。地質的にも生物的にも様々、実際いろいろなことが体験できますので、島の方々の協力も頂きながら、子供たちが実際に島に行って、いろいろなものに直接触れて、夜また勉強したことをみんなですぐに共有するという、そういった活動もしています。

最後に、課題でございます。

まず一つは、高いレベルで生徒が切磋琢磨できるような環境整備です。本校の生徒は、本当に様々な可能性を秘めています。また、いろいろなことに積極的に挑戦できます。ですから、世界の高いレベルの同じ年代の若者と交流をして、切磋琢磨できる機会があると、もっともっと大きくなるのではないかと考えています。

もう一つは、ICTを活用した学習環境をもっと充実をさせていただきたいということです。今はもうほとんどの生徒がスマホを持っていますので、そのスマホを使いながらそれぞれの学習成果とか、自分が考えていることをお互い発表し合うとか、そういうふうな場面をもっと作れますと、生徒の思考力とか判断力、表現力がより育成できると思うので、是非そのような環境を整備していただけると、もっともっと本校の生徒が輝けるのではないかと考えています。

以上で報告を終わります。ありがとうございました。

○中井教育長 ありがとうございます。

それでは、教育委員の方から、意見、質問をお願いいたします。

山口委員。

○山口委員 ありがとうございます。素晴らしい教育が伝わってまいりました。私の方から1点だけ質問なのですが、この課題の中で、世界中の高次なレベルの同世代と交流する機会の設定ということと、そして、2番目、ICTを活用した、これは割とリンクするところが多いかなと思うのですが、校長先生がおっしゃられたように、今生徒さんたちがタブレットだったり、スマートフォンを持っていますので、その個人で持っているものをもっと教育活動に生かすこと。学校がそれぞれに提供できればいいのかもしれないのですが、どんどん機械も進んでいきますので、どんどん古くなってしまっているのですよね。その辺りは、この西高校では、取り入れるということがどの程度可能なのかどうか、そこには何か問題があるのか、その1点だけ教えてください。

○宮本校長 ありがとうございます。

今、先生御指摘のように、本当にもう今スマホをほとんどの生徒が持っていて、自由に

いろいろなものを調べる環境がありますので、あとは例えば、学校の中で自由にWi-Fiが使えるような環境、そういうようなものを整備していただけるだけで、もう全部の生徒にタブレットを渡すというようなことは多分必要ないかと思います。

今でも幾つかの教室では実際に行っています。例えば本校の場合は、オンラインの英会話をフィリピンに居る方とやるようなプログラムを都の教育委員会から認めていただいていますけれども、そういうのが普通の教室とか、学校のいろいろな場所でできるようになるともったいいのではないかなと思っています。

○中井教育長 ほかにいかがでしょうか、ほかの先生。

宮崎委員。

○宮崎委員 御説明ありがとうございます。伝統的な高校が伝統に則ってすばらしく頑張っているというのはいいことだというふうに思います。

今のちょっと、Wi-Fiの方から申し上げますと、ICT環境ですね。これ、すでに相当BYOD(Bring Your Own Device)で、進んでおりますし、幾らでも無料で情報通信環境を利用した学習というのは進められておりますので、ちょっと設計すれば、新たなシステムを作らなくてもできるのではないのでしょうか。その辺のアドバイスは、そういう関係の専門家からちょっと頂ければいいのかなというふうに思っています。これは、課題に挙げていらっしゃるので、すぐに解決できる問題がたくさんあると思いますので、是非そうしてください。

もう一つ、これが大事なところだと思うのですが、非常にすばらしい教育をなさっていて、高いレベルでの切磋琢磨きたくまという。この高いレベルの中身をどう考えていらっしゃるのかというところが、これからの大きな課題になると思うのですね。冒頭で知事がおっしゃったように、これから数年後にはもう様々なことがAIで置き換えられてしまうときに、人間としてどういう能力を身に着け、あるいは伸ばしていったらいいかというところをかなり見据えて磨いてあげないと、未来の時点で問題解決能力を身に着けているためには、その辺が大きな課題であると非常に感じています。

大学側も、難関校といわれ続けるためにはどうすれば良いかということで、改革が激しく進んでいるところです。20世紀までのように、ただ学問の府で留まっていれば良いという訳にいきませんので、非常に難関校であり続けるための努力を各校がやっております。それからダウンロードしてきて、それに見合って高校はどう対応していくのかという、逆算の発想で進めていく場合、どのような能力に重点を置いていらっしゃるのかというのをちょっと伺いたいと

思いました。

それから、具体的な質問を一つ。ハーバードに行って感激した、それでハーバード大学に進学するような子というのは出ているのでしょうか。

○宮本校長 目標にする子供は出てきています。去年も1人チャレンジをしました。やっぱりなかなかハードルが高かったですけれども、例えば大学に行ってからもう1回チャレンジしようとか。やっぱり高い目標を直接見て、実際この授業を受けるとか、そういう体験をしてくると、子供はモチベーションがすごく上がるのですよね。今は無理でも、そのうちという子供は、やっぱり確実に増えてきています。

○宮崎委員 いいことですね。

あと、どういう能力を磨こうとしているかということとは。

○宮本校長 いろいろな能力は必要だと思うのですが、私は、やっぱりまずは思考力だと思います。物事をじっくり考えるという力を付けさせたい。

それと、もう一つは、一人で考えるだけではなくて、いろいろな人と一緒に考える、あるいは、自分の考えをちゃんと相手に伝えるとか、相手の考えをちゃんと聞くことによって、例えば、自分をもう1回客観的に見つめ直すとか、そういうふうな力が私はすごく大事だと思います。

もう一つは、自己決定力だと思います。つまり、自分の方向性や、自分の考えをちゃんと根拠を持って決めることができ、それをちゃんと相手に伝えるということができることがすごく大事だと思うのです。色々な人の話を聞くのは良いのですが、でも、決められないというのは困るので。これはやっぱり集団の中で色々なことをさせることで、自分が最後は根拠を持って決めるという力、これをやっぱり私は、是非子供たちには付けさせたいと思っています。

○中井教育長 ありがとうございます。

それでは、知事の方からお願いいたします。

○小池知事 現場のお話を伺っていて、大変希望を抱いたところでございます。

学校、ハーバードとかマサチューセッツ工科大学など、実際に御覧になるというのも、さっきのスタンフォードもそうですけれども、やっぱり世界を知るといのは大きいと思うのですよね。それも、それなり早いうちに。ということで、是非、この海外リーダーシッププログラムを続けていただきたいと思います。

それから、生徒たちの力を更に伸ばすために、海外の高校生との交流の機会ということも、

今のお話に通ずるかと思しますので、どういう形がいいのか、また、お話も伺わせていただきたいと思います。

それから、最後にありましたけれども、学校のICT環境をしっかりと整備をしたいという話でございます。どれぐらいどのような形で進めていくことができるのか、ちょっと検討もしてみたいと思っております。

この文武両道ですか。

○宮本校長 文武二道です。

○小池知事 二道ですか。これは、人間として素晴らしい教育だというふうに思っております。ありがとうございます。御苦労様です。

○中井教育長 ありがとうございます。

それでは、4校の状況をいろいろと話し合っただけでしたが、都立高校全体を通して、より広い視点から、それでは今後どうあるべきなのかということについて、知事、そして、教育委員の皆さんの意見をここで聞きをしたいと思っております。

ではまず、教育委員の方からお願いいたします。

では、遠藤委員の方から。

○遠藤委員 先生方、ありがとうございました。

もういろいろと本当に、こうあるべきだなという話を伺っていて感じたところですが、かねてから私、この場でも申し上げていることなのですが、教育の共通キーワードといえますか、それは、先生方の話の中からもいろいろ出ていましたけれども、「共生」だと思いますね。色々なものとの共生、世界の人材との共生、あるいは自然との共生、あるいは、先ほど宮本先生から話がありましたけれども、決断力、思考力ということを考える場合には人間同士どう共生していくか、科学技術と人間の授業のある先生のところも素晴らしいと思いました。そこがこれからの教育を考える上で重要です。常に頭の中に「共生」というキーワードを置いておかなければいけないのではないかなと感じたところです。

それから、最後1点ですが、グローバル人材ということで、先月、私、北京で日本の大学を何校か連れて、中国の学生を日本に留学させるフェアの責任者をやっていたのですが、そこで、ほかの国、特にイギリス、カナダ、オーストラリア、フランス、そういう欧米の先進国が、中国の中学生を対象に、それぞれの国の高校への留学を盛んに進めていて、私は日本の大学を連れていったのですが、一歩遅れてしまったなど。しかも、諸外国は全て公立高校なのですね。ですから、都の都立高校でも交流というのをやっておりますけれども、

他の国はもう既にその一歩先を行っている。全寮制の施設を用意して、中学生段階から中国の優秀な中学生、これを呼び込むという、こういうことも今後、都立高校の色々な意味のレベルアップのためにも必要なことなのかなと、ちょっと感じたので、一言だけ申し上げます。

以上です。

○中井教育長 では、山口委員、お願いします。

○山口委員 今日は、先生方のお話、そして、それぞれの学校の取組で、東京都の未来は明るいなというふう感じた次第でございます。

ただ一方で、このような機会を教育の中から提供していきながらも、今、各家庭の収入の格差とか、貧困の問題などもございますので、優秀な子供たちが、機会を与えられても一歩踏みとどまってしまうようなこともあると思いますので、そこはやはり都としてもどのような支援ができるかというのは、更に検討が必要かなと思ったことが1点と。

それから、やはり全体的な課題としては、優秀な教員をいかに確保するかということ。このような特色ある独自のカリキュラムが進んでいる中で、更に優秀な教員の養成というのが必要になってくると思うのですね。そこにもやはり、東京都はもしかしたら独自の指導者養成、教員養成の制度をもうそろそろ確立を考えていく時期なのかなというのを感じました。

大学などでは、やはり研究あるいは教育の基盤となるためにサバティカルを実施したり、短期留学制度を教員などにも実施しておりますので、都立教員に関してもこういったことを実施していくことで、教員の方々のモチベーションも維持していくということも非常に重要だなというふう感じました。

以上です。

○中井教育長 ありがとうございます。

では、宮崎委員、お願いします。

○宮崎委員 ありがとうございます。高校の教育現場で校長先生たちが生き生きと未来を見据えて、いろいろなことをお考えになっていらっしゃるというのに触れまして、大変心強く思った次第でございますが、何をもって優秀とするかとか、何をもって高い能力とするかというのは、やはり時代とともに激しく移り変わっていると思うのですね。

これまでは、学習指導要領など、与えられたこと、答えのある問題をいかに完璧に身に着けるかと、何パーセント覚えているかと。これからはそうではなくて、答えのない問題にいかに向き合うことができるのか。国際交流では特にそうです。西高が高いレベルでの国際交流を目指してくださっていますけれども、与えられたルールの中で最大限のパフォーマンスを発揮す

るだけではなくて、ルールそのものを如何に作るかというところに来ていると思うので、やっぱりその辺のところの転換というのが必要かしらというふうに思ったりしております。

それから、実験が続く科学技術高校の空白がというお話がありましたけれども、やっぱりその実験そのものはおもしろいんですね。しかし、この実験や研究がどういう意味を持つのか、人類にとって何を貢献しようとしているのかとか、そこに内包されている倫理は、例えば日本の感覚とか、他国の文化の中で同じか違うのかとか、そういうことをちょっと考える余裕というのも必要で、そのために大学の教養課程などは効果を発揮すると良いなというふうに私は思いましたけれども。

いずれにしても、やはり完結型ではなくて、連携型が小中高大ですね、とてもこれから必要だというのがお話からも浮かび上がってきましたし、山口委員がおっしゃったように、その中でもっとも必要なのはやっぱり指導者ですね。質の高い教員をいかに確保するか、これは国境を越えて行われていくことだろうと思いますけれども、そこが大きな課題だというふうに思いました。

以上です。

○中井教育長 それでは、秋山委員、お願いします。

○秋山委員 ありがとうございます。

私、ちょっと別な視点で意見を述べさせていただきます。

今回、このように整備された教育環境で学ぶ希望生徒には、土台に心身ともに健康であることが望まれると思います。そのためには、家庭教育と学校教育が車の両輪となって人材育成を目指して取り組むことが必要だと思います。

特に、この中高生という思春期には、心と体の変化、それから、進学交友などの社会的環境が大きく変わっていく中で、問題解決能力や、判断力や、ストレス管理能力という大きなスキルを身に着けることが必要になります。そのためには、思春期の時こそ家庭が大きな影響を与えて、家族のつながりを持つことが重要といわれています。今、もう一度家庭教育の在り方を再考すべきときかとも思っています。

本日議論されたような充実した学校教育が十分に生かされるために、学校健診、スクールカウンセラー、地域の保健活動などを活用して、児童・生徒一人一人の心身の健康管理、また、健康教育が充実されることも、これからの教育現場に必要ではないかと考えています。

以上です。

○中井教育長 ありがとうございます。

では、私からも 2 点申し上げたいと思います。

大学との連携の必要性についてお話がありましたが、現在都立高校で大学の講義を聞いて、それを高校の単位認定をするようにしているのは 20 校、186 校のうちまだ 20 校しかないということがございます。さらに、これを実際に活用している生徒は、年間 30 名前後しか今いないと。

これはなぜかという、高校の授業と大学の講義が時間的にバッティングしてしまうというようなどころがあって、東京には良い大学がたくさんありますけれども、やっぱりそれなりに行くには時間も掛かりますので、その辺では大学の方にも土曜授業だとか、長期休業中の集中講義だとか、高校生に配慮したそういった設定も必要なのではないかと思うので。先ほどのお話なども含めて、大学改革の中で、高校サイドにも配慮したような取組をこちらから働き掛けていくということが必要なのだろうというふうに思うわけでございます。

それから、もう 1 点は、都立高校改革というのはもう足掛け 20 年にもなろうとしているわけでありまして、この都立高校改革は、言ってみれば特色ある都立高校づくり。多様な子供たちのニーズ、あるいは学習意欲の喚起、そういった面から多様性を作っていくということが重要なファクターであったかと思えます。

そういったことではかなり実現されてきているわけですが、選択科目を増やすにしても、単位制高校みたいな形をとるにしても、やはりどうしても通常の学校に比べて教員が多く必要になると、お金と人手が掛かるということが大きな問題でございまして、そういう面では、先ほど宮崎委員からも出ましたけれども、アウトソーシングして、外部でそういった授業を、講座を作って、単位取得もそれで認めるみたいなことで、効率的なそういった多様なカリキュラムの設定ということも考えていく必要があるのだろうというふうに思います。

以上でございます。

では、最後に知事の方からお願いいたします。

○小池知事 本日は、これからの時代を担う人材を育成するための都立高校の在り方ということで御議論いただきました。そして、都立高校 4 校からの校長先生、現場のお話を直に伺うことができました。感謝を申し上げます。

私も都立高校にはできるだけ自ら足を運ぶようにいたしております。専門学科の高校である足立工業高校、農業高校、それから、チャレンジスクールの大江戸高校も訪問いたしました。それぞれ目的意識を持って、真剣に学んでいる生徒たち、そして、それをしっかり教えようとする職員の皆さん、教員の皆さん、それぞれ頑張っている、このように思いま

す。

それぞれ都立高校改革として進めている様々なタイプの学校を開設したり、学校の特色化の取組というのが着実に実を結んでいるということ、それぞれの学校の現状報告を伺って実感したところでございます。

これから、ますます豊かで希望あふれる社会を築くためにも、人をつくる教育の充実、大変重要でございますので、今後ともそれぞれの特色を更に伸ばしていただきたいと存じます。

キーワードの一つが「グローバル化の中での人材育成」ということだったと思いますけれども、是非、よく日本人というのは3Sだと。サイレンス、それからスマイル。謎のスマイル。それから、挙げ句の果てにスリープということで、国際会議では、日本人は3Sだとよく言われておりましたけれども、これからは、それぞれどんな場にあっても自分の考え、それをしっかりと伝えられるということで、是非この都立高校でのスピーキングということも、スピーチも含めてですけれども、しっかりやっていただけるような、そういう体制を整えていただきたいと、強化していただきたいと思います。

それから、ICTの話がございましたけれども、高校教育全体を視野に入れた、AI時代にふさわしい教育の在り方を考えていく必要があるかと痛感したところでございます。

それから、都政改革の一環として、目安箱を設けております。都の職員の皆さんから色々と現場での課題など、匿名であったり、実名であったり色々ですけれども、頂いております。実を申し上げますと、学校の先生からの投稿というのが一番多い。働き方の問題であるとか。多分この本庁は1万人ほど職員がいますけれども、学校になりますと数が少ないというところから、職員の皆さん、逆にそれがよかったり、人間関係で苦しんだりとか、色々あるのだろうというふうに思いますし、また、働き方改革において、学校の先生方の長時間労働ということも課題になっていて、その解決策として、例えば、それこそ学校業務の中のICT化によって、書類作成等々を簡潔にするとか、それぞれ工夫をしていかなければならないと思っております。

是非、そういった総合的な意味で、皆さんの声を今後とも聞かせていただいて、都立高校で学ぶことが、この時代を担う子供たちにとって一番意味のある時期だったというふうに思ってもらえるような、そのような教育をこれからも積み重ねていきたい、このように私は思っております。

それぞれ現場は御苦労が多いかと思っておりますけれども、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。ありがとうございました。

○中井教育長 ありがとうございます。

もうお時間も予定の時間を過ぎましたが、よろしゅうございますか。

では、以上をもちまして本日の会議を終了させていただきます。ありがとうございます。